

## 大連・旅順旅行の感想

広島大学マスタース会員 高田 忠彦

最近、年齢のせい、自分自身のルーツを知りたいという気持ちがますます膨らみ、チャンスがあれば、筆者が生まれた旅順を一度は訪問したいと思っていたが、幸いにも、広島大学マスタースが大連・旅順研修旅行を計画し、これを絶好の機会ととらえて参加することにした。

5月25日、朝方から降っていた雨も止み、マスタースのメンバーとともに広島空港から中国国際航空 CA154 便で出発した。2時間という飛行時間はあっという間に終わり、大連空港に到着した。大連市は、人口600万人、中国国内では中都市に位置づけられ、多くの日本企業が進出し、親日的な都市でもある。空港から観光バスに乗車し、大連日航飯店へと向かった。

5月26日、午前8時、観光バスは旅順へと出発した。1時間半の行程、約45kmの距離という。旅順は2009年、観光客に開放された。それまでは、この地を外国人が旅行することは許されなかった。旅順に到着し、まず、

訪れたのは、元関東法務院、ここは伊藤博文を暗殺した安重根が裁かれ死刑されたところである。拷問器具なども展示され、随分惨いことをしていたのだと感じさせられた。中国人ガイドの流ちょうな日本語の案内でうす暗い館内をくまなく見学後、職業軍人であった父が勤めていた旧関東軍司令部の建物に向かった。現



写真1 旧関東軍司令部の建物

在は旧跡博物館になっている。当日は閉館日で見学はかなわなかった。敷地内の旅順博物館を見物してから、バスの中から旅順の街並みを眺めながら歴史上有名な日露戦争の激戦地203高地に向かった。駐車場でバスを降りて、徒歩、10分程度の山道を砲弾型慰霊碑のある203高地を登った。203高地から旅順港が一望できる。旅順港は現在も中国の艦船基地港となって

おり、軍事的にも重要な位置づけにあるようである。確かに頂上から眺め見ると両サイドから突き出た半島が旅順港を囲っている。日本軍は旅順港に入ってくる 5km 先のロシアの軍艦を榴弾砲で撃沈したという。決戦時には両軍合わせて 1 万人以上の戦死者が出たとのこと。日露戦争といえは思いだされるのが乃木希典大将であるが、頂上の売店に彼の有名な漢詩“金洲城下の作”「山川草木うたた荒涼……」が書かれた掛け軸が売られていた。漢詩からうかがえるように恐らく日露が戦ったこの地域は、戦いの後は血なまぐさい風が吹き、荒涼として、わびしさに満ち溢れていたのであろう。乃木大将の気持ちをよく表していると思う。203 高地から見る景色からは当時が想像できない。昼食後、乃木大将とステッセル大将が会談した“水師営の会見所”を訪問、会見所の中国人ガイドのなまりのある日本語の説明に聞き入った。会見場の中には、日露の将軍が会談した机と長椅子が残されていた。会見所の前庭にナツメの木があり、その前で原野幹事が昔懐かしい“水師営の会見”の歌を聞かせてくれた。メロディは覚えていたが、同年代の原野幹事が歌詞を覚えていたのは驚いた。その後、露軍が作り上げた防御要塞後、東鶏冠山堡壘を見学した。露軍はよくもまあこのような堅牢な防御陣地を作ったなという感じであった。

日本の近代史では忘れることの出来ない日露戦争の激戦地、旅順の陸軍官舎で、筆者は生まれた。昭和 12 年に作成された地図を入手し、町名が残っているか調べたが、見出すことは出来なかったのは残念であった。地図には、旧市街と新市街のみが記載され、その地域に多くの日本人が住んでいたと思われる。帝政ロシアが作ったモダンな旅順駅にも立ち寄った。旅順の旧市街と新市街の接点に建てられたという。日本に戻るとき、この駅から汽車に乗ったのであろう。軍人であっ



写真 2 旅順駅舎

た父が病気にならなければ、そのまま日本に戻ることはなかったと想像するが、終戦前に広島市に戻り、広島で原爆に被災した。どちらにいても筆者は平坦な人生は送れなかったということか？人間の運命とはこういうものかもしれない。

翌日、5月27日も東北財経大学劉教授の講演聴講、大連市内の日本が統治時代の建てられた歴史上の多くの建築物見学や、広大留学生との交流会にも参加し中身の濃い研修旅行を終えた。大連市内や旅順に、70年以上経過した統治時代の建物が、現在も解体されず残されている。確かに、中国は不幸な時代を過ごしたのかもしれないが、中国は歴史を大事にする国かなとも思ったりする。大連・旅順は日露に長く統治されていた地域だったが、日本人は中国人と結構うまく共存していたのではないだろうか？往復の中国国際航空のフライトの機内放送は、英語と中国語のみ、乗客は100%日本人であるのに、日本語の機内放送はなかった。日中の政治的な関係が良好ではないためかもしれないが、現実を見ると、大連にも多くの日系企業が経済活動している。歴史的にいろいろなことがあったにしても、政経一体で友好的な関係が構築できれば良いのにと考えたのは、筆者だけではない。自分自身のルーツを訪ねる旅と位置づけ、亡き両親と姉の写真も携えた今回の研修旅行であったが、昨年台湾研修旅行と異なり、筆者自身にとっては、非常に意義のあるものとなった。計画された幹事の先生方に感謝の意を表したいと思う。